

Title	アルベール・カミュの青春：その歴史に於ける起点と、その意味を求めて
Sub Title	Albert Camus in his youth
Author	片山, 左京(Katayama, Sakyō)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1965
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyū : journal of arts and letters). Vol.20, (1965. 11) ,p.160(30)- 176(14)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00200001-0176

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アルベール・カミュの青春

—その歴史に於ける起点と、その意味を求めて

片山左京

「異邦人」「ペスト」「反抗的人間」「転落」はそれぞれ出版と同時に常に一つの文学的事件として世界中の話題にのぼり、れの影響は、世界的な広がり持ちかっ深いものであった。特に世代を代表する作家として、カミュが⁽¹⁾若い人々に与えた影響は絶大なものであったし、今もなさそうである。Bréeの言葉のように⁽²⁾ Peyreの「カミュが、現代ヨーロッパに於ける最も偉大な作家である。」と書かれた「転落」の表紙上の文句に異議を唱えるものがあるとしても、「異邦人」の出版以来、カミュは、少なくとも彼の世代の最も意味深い作家であることには変りはない。それ故他の大作家に於けると同様に、カミュの研究に色々な見解があったとしても別に不思議はない。しかしそれらの見解の相違は、単なる批評の視点の相違による結果であるだけにとどまらず、カミュの作家としての本質に根本的に係わる極めて重要な意味を持つものなのである。それらの見解は、さまざまな相違を持つものであるが、それらの相違を単純化すると、大きく二つに分類出来る。——哲学者としてのカミュ、或は芸術家としてのカミュのいずれかを重視する立場である。このような現象は「異邦人」「ペスト」「転落」等の文学作品と「シジフォスの神話」「反抗的人間」のエッセイ・フィロソフックとの二つの系列の存在から由来しているのである。即ちエッセイ・フィロソフックの *Idées* を中心にして、カミュに於ける観念の優越を重視する態度と文学作品の持つ *Images* を重ずる態度から生じて来た⁽³⁾見解である。例として「異邦人」の批評をとってみても、⁽⁴⁾「我々は、異邦人の批評を大別すると、二つのカテゴリーに分けることが出来る。《シジフォスの神話》を通じて異邦人を考察する批評と、シジフォスを無視しようとする批評と。」と Barrier は解説している。

このようなカミュ研究の見解の相違は、その相違の存在自体が、私には新たな研究視点の説定を是認させるに充分な理由となり得ると考えられる。⁽⁵⁾「一度ならずカミュは、

道徳的な声としては称賛されて来たが、芸術家としては逆に批評されて来た。このような判断は、私には全く誤りであると思われる。それと云うのも、人間として芸術家としての彼の全体的な試みを十分に理解出来ないことから生ずるものとする。彼の本質的に主観的なエッセイと、より抽象的で哲学的な小説との間の極めて複雑な関係を一層明確に見ようとする為は、ひるがえって彼の人生に対する芸術に対する態度を考察することが必要である。」この Cruickshank の研究能度のように、私もカミュ研究に於ける見解の違いも、カミュの生活と関係づけることによってのみ、一つの相関関係がうちたてられるのであり、単なる相違とは異ったある意味づけが可能になると考える。彼の生活との関係と云っても、当然そこに見出される一つの統一との関連に於てのみ、即ちある彼の生活の内にもとめられる歴史を通じてのみ、このような関係が存在し得ることは云うまでもないであろう。この小論は、その歴史の起点と云うべき時点を求め、かつその歴史の意味をさぐることを目的としたものである。そして又、この起点より再構成されるカミュの青春の歴史の序論をなすものである。

I.

「もっとも論じられるが、又最も理解されていない作家」とカミュは云われる。生前から、彼は、彼の注釈家・解説家たちによって、さまざまな qualifications — 哲学者・純正な芸術家・実存主義者・モラルスト・不条理或は反抗の思想家 etc— を与えられて来た。それに対して、例えば「私は、⁽⁶⁾ 事実哲学者でない。私は、自分が経験したことを語ることが出来るにすぎないのである。」⁽⁷⁾ 「本当に私は、哲学者ではない。私は、古典的な moral の問題を扱っただけである。」或は「⁽⁸⁾ いいえ、私は、実存主義者ではない。サルトルと私は、いつも二人の名前が一緒にされるのをみて驚いているのである。…サルトルは実存主義者だが、しかし私が出版した唯一の思想に関する書は、いわゆる実存主義の諸哲学に反対して書かれたものである。」彼は自らの立場を明らかにしようとして反論している程である。これらの様々な qualifications も、すでに述べた如く大きく二つのカテゴリー、カミュの哲学者としての面を強調するか、或は彼の芸術家としての立場を重ずるかに分けることが出来るのである。

この二つの立場に関して、それぞれ最も代表的な立場をとる ⁽⁹⁾ Thomas Hanna と ⁽¹⁰⁾ Germaine Bree の見解を比較してその相違点を見よう。そしてその相違点の内に私自身の立場を明確にしてみたいと思う。(そしてこの二人の評論は quillot の優れた総合的評論の後のものであることに注意しよう。)

(11)
Hanna は、カミュに関するフランス本国の研究作品の失敗はそれらの著者たちがあまりにもカミュを芸術家として見ようとした為であり、又彼を生きた伝説として示そうとする叙情的な努力に夢中になっているからであると批判して、カミュの不運は、彼の小説の分野に於ける成功が彼の全作品に哲学的関心を投げて来たまず第一に彼が哲学者であると云う事実をあいまいなものにしていることだと断言しており、彼の思想の範囲が理解されるまで彼の全ての作品の意味と重要性を充分かつ正当に評価することは出来ないと云う。彼によれば、まずカミュを哲学者として理解することによってのみ、我々は彼の文学作品を十分に評価出来るのである。これらの文学作品はより広般な哲学的ペルスペクティブの部分となすものであり、このようなペルスペクティブと関係づけられねばならないと主張する。

(12)
一方 Brée によれば、カミュはまず何よりも先に芸術家—それも芸術も芸術家もどちらもどうあるべきかについて明確な観念を持った芸術家であり、彼の芸術家としての意識は、他の全ての行動を説明し支えているのである。又カミュの考える芸術家として仕事は、本質的に彼の経験を“Transfigurer”することであると、この変容の過程に於て当然如何なる経験も、もしそれがまず最初に了解されたものでなかったならば、変容することは出来ない以上、ここに一つの了解が行われるのであり、それ故もし仮に我々が、その本質的努力が彼の知性を通して—了解過程を経て—彼自身の経験を明らかなものにしようとする方向に向っている作家を哲学者と考えるならば、カミュは、哲学者であると云えるにすぎないと、Brée は反論するのである。即ちカミュは、芸術家であろうとする意味に於て哲学者になり得るのだと云うのだ。

以上のように、Brée の見解は Hanna のそれとまったく対立した意見であり、二人が正反対なカミュ研究の態度をとっているのがはっきりとなる。この二つの見解は、カミュを一方は哲学から芸術へ、他方は芸術から哲学へと何う傾向を持った作家と考えている。両者ともそれぞれ一応我々を納得させ得る論拠を持っている以上、そのどちらかが誤っていると云うべきでなく、どちらもカミュの一面からのみ考察した結果であると考える方が正しいのではないかと考える。結局両者とも彼を理解するための根本的な問題点を把握し得なかったからではないだろうか。カミュに於ける哲学と芸術を直接関係づけようとしたからではないであろうか。カミュの哲学と芸術は、そのどちらかが一方に対して優越すると云った関係でなく、どちらも同等の意味を持つものであると云う認識を欠いているからこのような意見の相違が出てきたのであると考える。

更に Brée と Hanna の間に見られたカミュ評価の相違は、同時にカミュ自身の芸術・

哲学に関する見解の矛盾と対応するものであることを見のがしてはいけぬのである。この二人が、容易にカミュ自身の内に彼らの論拠を見出すことが出来たのもこの為なのである。それ故 Brée 或は Hanna の一方の見解のみをとることは一面的な正しさはともかく、カミュが持つ矛盾の一方の項をまっさつすることになり、カミュに対する総合的研究は不完全なものとなるのであろう。哲学を重視する人は、カミュ自身の言葉「小説は、哲学をイメージで置き換えたものにすぎない。」や「シジフォスの神話」「反抗的人間」にみられる観念と哲学的芸術論—「偉大な作家とは romanciers philosophes である。」 etc.—を重視することに由来するものである。芸術を彼の天職とする者は、芸術作品の存在それ自体と「私は哲学者ではない。…」と語るカミュの色々なインタビュー、*Actuelles I, II* にその論拠を求めているのである。

⁽¹⁵⁾ Quillot は「異邦人」が「シジフォスの神話」に、「ペスト」が「反抗的人間」に先立つと云う事実から思想よりもイメージと言葉の優位を主張し、カミュの芸術性を力説する。しかも彼は唯それだけの理由で、≪小説は哲学のイメージ化である≫と云う考えを一時期の思い違いと断じて、後にカミュは彼本来の正当な芸術観に立ちもどったときめつけるのは、この言葉が語られた1938年を中心とした数年間にカミュが書き語った芸術についての見解やこの頃創作された作品の本来の性格を無視することを意味するのであって、彼の芸術的意図とその意図の *Raison d'être* をもまっさつすることになり、彼の歴史の内に空白を現出させるのである。Quillot の例を見ても、都合の悪い言葉は、全て無視したり誤りとすることによって、カミュの内に見出される矛盾を矛盾として受け入れるのではなく、cohérent なものを求めるあまり、カミュの本質とも云える *dualisme* に由来する矛盾を解体してしまっているのである。これでは、彼の個々の作品のカミュの内に於ける位置を正しく理解するのをさまたげることにもなるであろう。

要するにカミュ芸術家・哲学者と云う *qualification* はどちらも同じ意味を持つものでもし一方を他方の優位に置くならば、彼の *dualisme* の *Raison d'être* がカミュの実存と密接に結びついたものであることを見のがしているのである。これは、全てカミュの作家としての特徴を特に青春のそれを正しく理解して、そこにカミュ研究の出発点を求め得なかったことに由来しているのではあると考えられる。

II.

それでは、この問題を青春期のカミュの立場から考案してみよう。⁽¹⁶⁾「問題は、書く術を起える処生術（というよりむしろ生き抜いたという体験の認識）を手にすることだ。

そしてつまるところ偉大な芸術家とはなかならず偉大な生活者なのだ。」及び「不条理の芸術家にとっての問題は、作る能力を超えるこの生きる能力を獲得することなのだ。そして結局この不条理の風土のもとでの偉大な芸術家とは、何よりも先ず生きる人なのである。」と語るカミュ自身の言葉を正しく理解しなかったと云うことに今まで見て来た混乱があったのでわないかと考える。カミュは作家でありながら、創作にまして生きることを執着し、しかも常に生きるとうことと創作は、密接に結びつけられないければならなかったのである。このことはカミュの作家としての特徴を端的に表わしているものであり、重視しなければならない。

芸術は、彼にとって「⁽¹⁸⁾…これこそ人生の真の意味だと思われるものにもっとも確かな手ざわりでふれた。そこでは芸術作品だけでは決して充分ではないであろう。芸術は、⁽¹⁹⁾ぼくにはすべてではない。せいぜいひとつの手段でなければならぬ。」「創造すること、それは二度生きることである。…これはまたすべての不条理の人間が、人生のあらゆる日々⁽¹⁹⁾に自己を投入して行っている不断の測り難い創造以上の意味はもたないのである。」との言葉が示すように、真実前をにした時彼が採り得る単なる手段であり、又創作は二度生きることであるが、それは他の行為以上のものと評価されていないことに注意しなければならないのである。芸術は、カミュの青春に於ては第一に⁽¹⁹⁾生きるとう云う大前提の上に、⁽²⁰⁾真実を表わす手段として、「⁽²⁰⁾丁度泳がねばならないのと同様に、私は私の体がどうしてもと言いはるから、私はものをかかなければならないのだ。」このように書くとう云うことは、一つの行為としてその位置を定めているにすぎないのである。

⁽²¹⁾「ここで云う生きるとは…人生について考えるという意味を含んでおり、それは又体験とそれに対する意識のあいだの微妙な関連さえも意味している。」⁽²²⁾「この場合生きるとは、省察することを意味し、また同時に体験することを意味している。」カミュの生きるとう云うことは、生きていうと云う体験と生きていうことに対する認識—生きていう事実とその考察から成立していることが知られる。生きるとう云うことは、それ故哲学の成立の基礎になり得る条件を提出している。しかも⁽²³⁾「哲学の価値は、哲学者の価値によって決まる。人間が偉大であればある程その哲学も真実である。」と語るカミュは、哲学とそれを生きる人間との不可分な関係を述べているのであり、人が生きていうことのうちに得た考案が哲学であることを語っているのである。哲学は、芸術と同様にカミュにとっては、生きるとう云う行為の必然の産物であることがわかるのだ。Brée は、カミュのエッセイ・フィロソフィックの成立に関して、彼の Ethique に対する関心の深さをその理由としてあげているが、⁽²⁴⁾「⁽²⁴⁾倫理学>自体が、その一面に於ては一つの長く厳しい自

「告白にほかならない」との言葉通り、彼の **Ethique** に生きることの考察に由来することとは明確である。

このようなわけで、芸術と哲学は、カミュの生きるという行為を中心としたまったく同一次元に於ける人間の行為の単に異った表現手段であるにすぎないことが明らかになる。⁽²⁵⁾ 「私は、ジャンルの混活を避けるために、色々の領域で書くのである。こうして、行為の言葉で芝居を、論理の形でエッセイを、心情の暗さの上に小説をつくりあげたのだ。これらの多様な書も実際は同じ事を語っているにすぎないのである」しかしあまりにも生が関心の中心をなしていた青春期には、まだこのような表現手段の明確な分化は見られず、⁽²⁶⁾ 「我々は、イメージの型でのみものを考えるにすぎない。それ故もし諸君が哲学者になりたいと望むならば、小説を書きなさい。」とか、⁽²⁷⁾ 「小説は、哲学をイメージに置きかえたものにすぎない。」等の誤解の生じやすい文句が現われてくるのも、カミュが哲学と創作を同一次元のものと考えていた証拠になるであろう。

以上のような理由で、カミュを論ずるとき、まずカミュが《生活者 *vivant*》であったと云う立場を離れて哲学・芸術の一方から他方を論ずるのは危険なことであると考えられる。もっとも *cruickshank* は、この二つの傾向を統一しようと努力して彼を *a philosophically-minded creative artist* と呼んでいる。

さて哲学者＝生活者＝芸術家なる公式を成立させるカミュの生きることに對する執着は何処から出てくるのであろうか。一（他の人々は、彼の幸福の追求を彼の第一のテーマとするが、私は単なる言葉の遊びとしてではなく、ケレアの言葉をその反論として引用したい。⁽²⁸⁾ 「…私は生きたいからです。幸福になりたいからです。」カミュは、幸福の前に *vivre* と云う言葉を置いているのである。）一この間に答えるには、この等式の両端の頃からその答えを求めなければならない。既に生きることの行為であった芸術・哲学を通じて一それぞれの作品によって答えをもとめなければならない。

Ⅲ.

⁽²⁹⁾ 「作品は告白なのだ。ぼくは証言しなければならない。」或は「シジフォスの神話」に於てくりかえし語られる芸術は人間が不条理の世界で生きて行く証言であると云う等のことから、カミュの作品の証言性は、他の作家と較べて著しく強調されている。更に⁽³⁰⁾ 「作者から離れた芸術と云う観念は単に時代遅れであるばかりではない。それは嘘である。多くの作品を生み出す芸術家とは反対に、多くの体系をつくり出した哲学者は未だかつて一人もなかったことを人は指摘する。しかしこれが正しいのは、未だ曾ていかな

る芸術家もさまざまな姿の下にたった一つのもの以外のものは決して表現してこなかったのだということを認める限りに於てである。」これから、カミュの作品より得られる証言の正当性と証言の内容の単一性を、我々は期待出来る。そして彼の作品の証言は彼の意図したものとして、彼の告白として論理の根拠となることが出来るであろう。

では作品の証言を見てみよう。問題とするのが青春であるから、青春の作品のみに限定する。

l'Envers et l'endroirt (裏と表)⁽³¹⁾：「誰にでも死はある。が銘々が自分の死を死ぬのだ。」この事実を発見した青年の貧困の世界での暗い苦しげな、いわば死の研究の為のエッセイである。

Noce (結婚)：重病人の《意識的な死》を生きる讃歌、即ちカミュが、彼を悩ませ、苦しめる死を恐れることなく明晰に意識することによって、逆に生きることへの激しい熟望を産み出すエネルギー源にすりかえようとする熱い試みの書。

Caligula (カリギュラ)⁽³²⁾：préoriginal の第一稿—「caligula 一或は死の意味」—の副題が示すように、妹の死に始まり、自ら死によって終る死の問題にとりつかれたローマ皇帝の異常な行為を通じて演ぜられる生きる意味をさぐる自殺のドラマ。

l'Étranger (異邦人)：主人公ムルソーのいわば自殺がテーマ。母の死に始まり、殺人、ムルソーの処刑につづられた生の意味—世界不条理の世界に生きることの意をもとめる物語。

Le mythe de Sisyphe (シジフォスの神話)⁽³³⁾：「本当に重大な哲学の問題は一つしかない。それは自殺である。人間が生きるに値するか否かを判断することこそが、哲学の根本問題に答えることである。」冒頭の句にして書かれたこのエッセイは、自らに死を与える可否を全巻にわたって論じており、その自殺否定も哲学的パルスペクティブのもとにカミュの死に対する生きる試みのドラマを語っているのだ。⁽³⁴⁾ Amer の言うように「シジフォスの神話」のドラマチックな様子や不正確な哲学批判のかけには死と云うスキャンダルを前にした深い苦悩がうかがい知れるのである。

⁽³⁵⁾ 以上のように、カミュの青春の作品は全て死の研究、死の認識の重要性、死の意味、

自殺等の内容を示し、それらは、死を中心としたエッセイ・ポエティック、物語、戯曲、エッセイ・フィロソフィックであることが明らかになるのである。カミュの生への激しい愛情は、死に対する彼の全存在をあげた反抗によって説明されるのであり、作品は、その反抗の軌跡を表わしていることがはっきりする。「この厳しい死との対面、太陽を愛する動物のこの肉体的な畏怖、これこそが青春でなければならぬ。」真にこれこそがカミュの青春に外ならぬ。彼の意識の中心には死が存在しているのであり、カミュの生きることは一さまざまなニュアンスを持つものであるが—もっとも原初的なかたちでは人間の本能的生命力と死の意識との対決から生れるエネルギーの現れあることが明らかになる。サルトルが、カミュのフランス文化に対する功績として「君は、偉大さの感情を美に対する情熱的な嗜好に、生きる喜びを死の意味に結びつけたことである。」と語るのはまさにこのためである。カミュの生に対する熱情は、死の意識との関係づけによって説明されて来た。それではこの死の意識はどのような性格をもつものであろうか。

彼の死は、一般的には自殺と殺人とに特徴づけられる。自殺は、特にカミュの青春の死を象徴する。自殺は、自己破壊による生の無価値の証明であると同時に、この死は自己にのみがかかわり合う死であって、その孤立的性格に注意しなければならない。具合よくしつらえられた机を前にして自殺を讃美していたショーペンハウエルの悲劇を、カミュは同情を持って語り、その悲劇のもつ意味を十分に彼も又生きたのであるが、彼の青春の作品を通じて我々に与えられる切迫した死の *hantise* は、ショーペンハウエルのそれの比ではないように思われる。何処からこの死の *hantise* が生じてくるのであろうか。⁽³⁹⁾ *Bespaloff* が云うように、カミュが、歴史が激しい死の風土の中に養った世代に属していることに由来しているのであろうか。或は ⁽⁴⁰⁾ *Moeller* の語る如く、聖書、ドストエフスキー、ニイチェ（時にツァラツストラ）からの影響によるものであろうか。それとも又 ⁽⁴¹⁾ *Roblès* がくり返すように、カミュの死の *hantise* は、彼の母方のスペイン系の血統を通じて、競技場でたえず死に親んで生きている闘牛士によって象徴されるスペイン人の死の *hantise* に結びつくものであろうか。これらの人々は、カミュの死の意識を歴史や知性や生理学上の産物と考えているのである。しかし≪一般的な死でなく、自分は死ぬ≫と云う個別的な死の意識に、これらの外的な事情による抽象的な死が先行する筈はないのである。「世界は溶け去った……もう何も存在しなかった。勉強も野心もレストランでの選り好みもお気に入りの色も、自分がそこに決められていた死と病とを除いては。」装い持って生きて行かなければならなかった日常生活がくずれる時、扮飾の下から現われるもの、それが死と病なのだ。彼の内的生活の中心は、この死と病をめぐっ

てなされているのである。「⁽⁴³⁾病気ほど蔑むべきものはない。それは死につける薬だ。病は準備する。死に年期を入れる。」病気は健康人の漠然とした死の観念を個人的なまの死の恐怖に姿容し、病人に死にいろどられた時間を返すのだ。死と病は、カミュに於ては別個に存在しているのではない。病は、なまな死の契機であり、死の意識を支えるものなのだ。「⁽⁴⁴⁾カミュは、20才のとき人生を一変するような病にとつぜん冒され、不条理なもの一人間を拒否しようとする愚かしいものを発見した。彼は、それを馴致し、自分の苦痛にみちた条件だと考えて難局を切り抜けた。」とサルトルがカミュの青春を語る時、病気を直接不条理なもの一死の発見と結びつけているのは、カミュの死の性格を説明すのにまことにまとを射た考え方である。

私は、カミュ研究の立場を生きる[・]と云うことに求めた。しかしカミュの生きることは、激しい死に対する反抗の内にかがいが知ることが出来るのである。それ故カミュに於て生きるとは、死の意識のさまざまな変化につれて反抗する生命力の歴史なのだ。一方死の意識は、病気の程度によって変化するのだ。生きる[・]と云うことは、この病に対する行為の歴史となのである。この病気を決定づけることによって、この痛気の軌跡をたどることによって、死の意識の歴史を通じて逆に生きる[・]と云う歴史を求めることが出来るであろうし、生きる[・]行為の一つである芸術・哲学・演劇にいたるまでこの歴史の上に位置を定めることが出来るであろう。

この病気を、サルトルはカミュが20才の時冒された病気だと云っているが、我々に与えられた伝記的事実には、そのような病気は存在しない。恐らくサルトルの思い違いではあるまいか。20才を中心として見た場合、我々がきずくのは17才の結核発病と24才の再発である。しかし24才の再発は、すでに「裏と表」が書かれた後であるし、そこには死の hantise がみられるから、サルトルの云う一大転換点になる病気とは、17才の結核であることが明らかになる。だがそう断言するには、単に伝記的事実に病気の存在を求めるだけでは充分でない。この時期にこのような重大な事実の存在を肯定させる大きな変化が見られるかどうか知る必要がある。カミュ自身語る。⁽⁴⁵⁾「幸運な病気のお陰で、私は行きつけた海岸や馴れ親んだ楽しみと別れたのでした。相変わらず乱読でしたが、新たな激しい熱ばさ加った。」この病気が、肉体的生活の決別と知的生活への端緒の契機になっていることが知られる。このように伝記上の発見とカミュの内的な変化とが一致しており、問題の病気が、17才の終核であることが明白になった。カミュは、病人になったのである。それ故今まで見て来た生きる[・]と云うことは、病気におよびかされた人間が死に向って行う反抗なのであり、それは、終局病人として生きる[・]と云うことに外ならな

いのである。「この厳しい死との対面、太陽を愛する動物のこの肉体的な畏怖、こそこそが青春だ」彼の青春の歴史は、病人の歴史のことなのである。そして17才が、その起点となるのである。

IV.

終核は、他の人々にとってもそれに罹ったら大きな打撃となるに違いない。では何故結核が、カミュに於て特権的な地位をしめることが出来るのか。これを知ることは、カミュの歴史の起点として17才を設定することの重要性を証明することになるであろう。結核が、カミュに与えたショックの大きさは、17才以前の生活との関連からのみ理解されるであろう。

ある日、彼は激しいサッカーの試合を終えて、汗まみれになって帰宅した。その時突然悪寒に襲われた。医者⁽⁴⁷⁾の診断の結果かなり進行した肺結核が発見されたのであった。アルジェの自然に酔っていた17才の少年は、このようにして全く突然に何の心の準備もなく体の弱さを知らされた。「病気をしているのは、いかなる場合にも愉快なものではないで、しかし病気のなかで身をささえてくれて、ある意味でその身を打ち任せていられるような町や国⁽⁴⁸⁾」ではなく、「気候の激しさ、人々の営む事業の重要性、装飾的なものの言うに足りない僅少さ、夕暮れの速かさ、それから楽しみと云うものの質などすべてが健康を要する国」アルジェリアに住むカミュは、健康を失ってしまったことを知るのだ。17才のカミュにとって、アルジェリアの病気に対する非情さや自らの年少さ故に、結核の発見がどんなに受け入れ難く、又どんなに激しい衝撃を与えたかは相像に難くない。しかし唯それだけではない。カミュは貧しく幸福な空の下で敵意はなく一致の感じられる自然の中で生まれた⁽⁴⁹⁾。「ある程度の富があると、空でも星々に満ちた夜でも自然の財産であるように思われる。しかし低い階級ではすべての意味を取り返す、即ち金で買えない美となるのだ。」彼の富は、貧しさ故に彼に送り返された自然の美しさなのである。この富にかこまれてカミュは、⁽⁵⁰⁾「私自身他を夢みるためには、感ずることに余りこもいそがしかった。」と語る。野獣のように自らの肉体をとうして、肉体によってこの世界を生きていたのだ。窮乏生活を送っていたが、また一種の享楽生活を送っていたのだ。彼の生活を保証するのは、彼の健康な肉体であったのだ。これによって彼は動物のように無垢に世界の一部として、世界との合一に酔い痴れることが出来たのである。この無垢な合一感⁽⁵¹⁾は、貧困やさまざまた不運にもかかわらず、彼の幸福を保証し、彼の *laisson d'être* となって来たのだ。この合一があるかきぎり「黄昏のアルジェに淡い不

安を感じる」ことはあっても「ひとときの完璧な生の眩暈にひたされ、生きて存在することを悦」び酔う少年カミュは、「存在の問題の討議されることのない町」に住む多感な少年であったのだ。

しかし彼は、病気になった。「病は準備する° 死に年期を入れる。」の言葉が示すように、病気は死の予言者として姿を現す。結核は、自分の死の予想をもたらし、死を自覚させる。⁽⁵⁵⁾ Lebesque の語る如く、カミュの結核は、彼の死すべき運命を自らに知らせ、しかも徴熱と共にたえず知らせつづけるのである。それ故死は、「肉体的な恐怖」になるのだ。死の意識が、始めて彼の生活の中心になった。こうして不安な生活が始まるのである。死に目覚めた意識は「何もをもつぐわぬ死、そしてもう一方にはありとある光」を認識させ、人間の死とそれに関係のない世界との間の抜き難い Distance を知らせるようになるのだ。死の意識を通じて、意識する自己と対象となる自己・他人・世界が、ある乗離を持つようになる。⁽⁵⁷⁾ それ故カミュの人間を、Nguyen-van-Huy は l'Homme-espace と呼称するのである。要するに結核は、死の自覚をもたらすと同時に、あらゆるものとの間に乗離を引き起し、不安定な世界に病人を追いやる契機となるのだ。

⁽⁵⁸⁾ 「病人は、単に気管支・胃・心臓が悪い人間と云うだけではない。彼は、虚弱化しおびえた世界を歩んでいるのである。」カミュは、結核にいざられた世界に投げ込まれたのである。⁽⁵⁹⁾ 「人間は、自分の体を通してこの世界に住むのだ。」それ故カミュは、病んだ肉体によって病んだ世界を生きなければならないのである。それは、彼にまったく未知の世界であった。しかし肉体にはそのことがわからない。肉体は、本能的に生きることを要求し、世界との合一を以前通り望むだけである。だがこの合一は、感覚的なものとしてとらえられるから、病んだ肉体でも合一感を味うことは許される。しかし病気が一死の意識が、以前の合一感の無垢な味いを失わせてしまったのであり、以前と違って合一感を味うにも彼の意識的な協力が必要となってくるのである。それ故激しいノスタルジーの対象として常にカミュに求めつづけられているが、それだけでは必要かつ十分な彼の Raison d'être の保障にはなり得なくなってしまうのである。即ち死の意識は、この合一を病んだ世界との合一とみなすのであり、カミュの少年期の世界との無垢な関係を打ちこわし、新たな不安な世界の内で、新たな彼の Raison d'être を求めなければならない状態に、カミュを投げ込むのである。⁽⁶⁰⁾ それ故彼にとって「失われた楽園が、唯一の楽園である。」

このように結核は、まず死の意識の目覚の契機となり、病んだ肉体と死の意識が、少年期の幸福と彼の Raison d'être を危機においこんだのである。それであるから、結核

がカミュに与えたショックが、いかに大きなものであるかは容易に納得されるのである。結核のカミュに於ける意味は、病による死の自覚を保持しながら病人として世界に生きなければならないと云う存在様式を彼に与えたことである。そして又死ぬという不安が、新たに彼に彼の世界に入ることにより、それまでのように世界に安住することが出来なくなる。彼は、不安に動かされて生きはじめなければならなくなり、一つの動きがみとめられるようになる。死の不安に動かされた一人の人間の歴史が開始するのである。そして肉体の盲目的生命と死の意識との間の緊張、その不安な状態が、カミュを動かすエネルギーの源となり、歴史の動力となっているのである。そしてその歴史の起点は、今までみて来た理由で、結核にかかった17才に求められるのである。このような重要な意味を持つ病気がなぜ見すごされて来たのであろうか。「彼の最初の結核の発病に読んだ数年の間、若いカミュの行動は、彼の上へのしかかってきた脅迫に対して何かしら絶望的反抗を表わしている。ほとんどの時彼は、病人であった。しかし誰もそうだと思いつくものはいなかった。」と Brée は、カミュの病人らしくない態度を語っており、Roblès も同様のことを語っている。彼は、生活上では病人に見えなかった。それは、次のカミュ自身の言葉が説明してくれるであろう。「…私がいつも最大の力と働きを引き出して来たのは、どんな状況にあっても平常の人間であろうとする私の努力の内からなのだ。」彼は、努力して振舞っていたのである。「たとえ絶望にすっかりとりつかれていても、あたかも希望をいだいているかのように振舞わなければならない—さもなければ自殺しなければならなくなる。」このような装いが彼が病人であった事実をおかしくしていたのである。このカミュの装われた病人の歴史は、この結核と云う即物的な *maladie=mal* を「シジフォスの神話」の序文に述べられている *mal d'esprit* (精神の病、精神の悪) としてとらえようとする歴史とも云うことが出来る。それ故神話の英訳 Hamilton 版の序文に、この *mal d'esprit* に関して「…ある個人的な経験が、この問題を明らかなものにするべく私を駆り立てたのである。」とつけ加えられているのである。

それでは、この歴史と作家としての歴史との関係を見てみよう。既にのべたように創作は、彼の生きると云うことと密接な関係を持つものである以上、この歴史の起点に於ても、当然の作家として歴史との関係は予想出来る。

カミュは、死を自覚することによって、自己・他人・世界との間に一つの *Distance* —即ち乗離感を認めざるを得なくなった。それ故「伴を求めること、ありとあらゆる絆を。」と彼は語らなければならなかったのである。この乗離感は、結核によるショックの結果激しい苦悩を伴ってそれまでの世界との合一がこわれて姿をあらわしてきたの

である。これは、⁽⁶⁶⁾Grenier の語る哲学的意識 (Sentiment philosophique) ——世界の内に居ながら世界と同一でないと言う意識——と同じものである。そして又この意識こそすぐ気がつくことだが、まさしくカミュの不条理の意識なのである。この哲学の出発点となる意識をもって、世界・他人・自己について考えると云う行為が始まるのである。突然現われた新たな世界の分裂状態に投げ込まれたカミュは、⁽⁶⁷⁾ニヒリズム (全てを疑うこと) によって、未知の世界との関係の創造に向わばならなかった。その為には、世界内に於ける自己を知ることが第一であったに違いない。「⁽⁶⁸⁾芸術家が、最初にする選択とは、まさしく芸術家になろうとすることであり、そして芸術家になろうとするのは、自分が何者であるかを考案することに於てであり、彼が芸術に関していただいている観念のためである。」この自己を知ろうとする行為 (カミュは、心理学も行為と語る。) は多少のニュアンスの違いをみとめても、カミュが⁽⁶⁹⁾Brisville とのインタビューで打明た「私は、17才の時作家になりたいと考えた。」と云う言葉の説明となることが出来る。結核により目覚めた死の意識とそれに対する肉体の反抗との間につくりだされる緊張—即ち⁽⁷⁰⁾「苦痛が、人を思考と創造とに押しやるのだ。そもそも思考と創造とは、苦悩から同時に出発しているのだ。」要するに17才で彼が作家になろう望むのは、反論として予想されるこの同じ年の外面的な事実の影響 (⁽⁷¹⁾Grenier との邂逅、大学入学、小説 “Douleur” の発見) は、一応さておくとして、結核による世界内に於ける自己を考案しなければならなかった事実—これは又啓学的考察の起点である—によるものであろう。この自己考察から知的冒険を始めなければならなかったカミュは、特に若くて自己と世界との関係を明確にすることが出来なかった時期には、哲学と文学との間に彼の実存との係り合いの本質的な性格に関して差異を認めることが出来なかったのである。そこからあの誤解を招き易い哲学と文学を結びつける考え方が由来するのである。逆にこの二つの領域を同一視することが、17才の時の彼のこの意図が、少年期の安定した世界の崩壊によって強いられた苦痛に満ちた自己観察から生じたものであることを証明している。哲学は、カミュの世界の *élucidation, justification* であり、文学は、哲学の余白をおぎなうものである。それ故 Gadourek のように、以上のことをサッカーと云う失われた肉体生活の補償の為であると考えるのは、その正当性を認めても、私にはそれだけでは充分な説明になるとは思えない。と云うのも、18才の頃 ⁽⁷²⁾Sud 誌上に発表した彼の4つの小論のテーマの特徴 (反抗、芸術の逃避性、自己の支えとなるモラルの探究) から、単なる肉体的な欠陥に対応した生活の変化と云うよりは、もっと彼自身の奥深いところに係りを持つ病気との対面による死の意識の目覚めの結果であると考ええる。

私が求めることが出来た歴史—(17才で始まる病者としてのカミュが、ニイチェのいわゆる“病者の光学”を求める歴史、死に対する生命力の抵抗の歴史、苦悩の歴史)それは、彼の作家としての歴史、啓学者としての歴史と全く同じものであることが明らかになるのである。

彼の作品や知り得る彼の行為を通じて、このような歴史を求めることにより、逆にその統一の内に作品を位置づけることが可能となり、個々の作品にあらたな視点を求められるであろう。又それぞれの作品の持つ Images に新しい価値と、無視されて来た Images の個々の時点に於ける重要さが知られることが期待出来るであろう。しかし最も重要なのは、この歴史が彼の実存の活動の中心として作品の内容に反映すると云うことである。⁽⁷³⁾「現代芸術の誤りは、ほとんどいつでも目的の前に方法を失行させ、内容に形式を、主題よりもテクニックを失行させることである。…私は、主題に形式を採用したのである。…」カミュは、形式よりも主題を重ずるが、すでに見たごとく、彼にとって作品は、証言告白でもある。即ち作品の主題は、彼自身の内的生活と密着したものであることが分る。それ故、この歴史を通じて、作品の形式の問題にも、カミュの意図の側からである視点を期待出来るのである。更に派生的に諸と否を同等の力で受け入れながら、「結婚」を歌うカミュ、カリギュラの饒舌とムルソーの沈黙、伝記的事実に反する「裏と表」の暗さと「結婚」の明るさ、「結婚」の肉感的な詩と「シジフォスの神話」の冷やかな啓学 etc カミュの持つさまざまな矛盾背反、カミュの特徴をなす Dualisme の問題も、この歴史との関連によってのみ説明されるであろう。

だが死の意識によって、カミュの歴史を統一することは正当であるか、又可能であるか。可能であれば、それはどのようにしてもとめられるのか、最初の間に関する答えは簡単である。カミュ自身がその未完の小説「幸福なる死 la vie heureuse」に於て、自ら死による自伝統一を試みているからである。後の間に対しては、この小説の内で彼が試みた三つの観念（「自然死」「意識的な死」「幸福な死」）による統一を、そのまま利用して、更に二つの段階をつけたして、死の観念の歴史を仮設したいと思う。

- (1) 自然死
- (2) 意識的な死
- (3) 幸福な死
- (4) 想像的な死
- (5) 観念的な死

結論として、カミュに於ける17才の意味は、彼の青春の全ての行為をさまざまに彩ど

る死の意識（ここで云う意識は、あたりまえのことであるが、さまざまな様態—知覚・想像 etc—を含めたものである。）歴史の発端をなすと云うことである。

- ・ *l'Envers et l'endroit*, *Noces*, *l'été* は N.R.F. の限定版 *Albert Camus: Récits et théâtres*. (1958) のを使用。
- ・ *le Mythe de Sisyphe* は1956年の Gallimard 使用。
- ・ 他に引用される作品は Pléiade 版 *Théâtres. Récits, Nouvelles* を使用。

- (1) Henry Bonnier, P. V. D. Bosch, Colin Wilson, etc. はそれぞれ彼が青年たちの精神的指導者であったと語っている。
- (2) Germaine Brée : Camus. p. 5
- (3) 例外として John Cruickshank: *The novelist as philosopher* p.207
- (4) M-G. Barrier: *l'art du Récit dans l'Etranger d'Albert Camus* p.1
- (5) J. Cruickshank: *The novelist as philosopher*. p.208
- (6) *Actuelles I* p.83
- (7) Odette Lutgen: *En dépit de leur gloire*. p.38
- (8) Roger Quillot: Pléiade 版 *Biographie* p.XXXIII
- (9) Thomas Hanna: *The thought and art of Albert Camus*
- (10) Germaine Brée: Camus
- (11) T. Hanna: *The thought and art of Albert Camus préface* p.VIII
- (12) G. Brée: Camus p.9
- (13) *l'Alger républicain* 1938. 10. 20
- (14) *le mythe de Sisyphe* p.138
- (15) Roger Quillot: *Albert Camus, la mer et les prisons*.
- (16) *Carnets I* 1938 p.127
- (17) *le Mythe de Sisyphe* p.135
- (18) *Carnets I* 1935 p.16
- (19) *le Mythe de Sisyphe* p.130
- (20) G. Brée: Camus p.63 *la vie heureuse* 主の人公 Mersault の言葉。
- (21) *Carnets I* 1938 p.127
- (22) *le Mythe de Sisyphe* p.135
- (23) *Carnets I* 1937 p.50
- (24) *le Mythe de Sisyphe* p. 137~8
- (25) Paul Ginestier: *la pensée de Camus: Appendice: la dernière interview*. p.203 Mr. Robert D. Spector との対話。
- (26) *Carnets I* 1936 p.23
- (27) *l'Alger républicain*. 1938.10
- (28) *Caligula Acte III Scène VI*. p.78
- (29) *Carnets*. 1935 p.16
- (30) *le mythe de Sisyphe* p.133

- (31) l'Envers et l'endroit p.24
- (32) Pléiade 版 p.1731
- (33) le mythe de Sisyphe p.15
- (34) Hommage à A. Camus N.R.F. Herry Amer : le mythe de Sisyphe
- (35) Pierre Nguyen-Van-Huy は、La métaphysique du bonheur chez A. Camus の p.42~44
にかけて同じような分析を行っている。
- (36) Noces p.54
- (37) Carnets I 1936 p.41
- (38) Jean-Paul Sartre : Situations IV. réponse à Albert Camus, p.111
- (39) Rachel Bepalott Esprit 誌 (1950) からの英訳 The world of the man condemned to
death. p.93
- (40) Charles Moeller : la table ronde 1960 p.105
- (41) Emmanuel Roblès : Collections Génies et Réalité : Camus, Soleil et Misère p.63 及び
H. Bonnier «Albert Camus ou la force d'être» の préface p.12
- (42) l'Envers et l'endroit p. 28
- (43) Noces p.54
- (44) J.P. Sartre Situations IV Albert camus p.128
- (45) Hommage à Gide A.Camus p.223~224
- (46) Noces p.54
- (47) la peste p.1218
- (48) ibid.
- (49) l'Envers et l'endroit. p.26
- (50) ibide préface. p.12
- (51) l'été. p.350.
- (52) ibid p.318
- (53) ibid. p.318
- (54) Noces. p.54
- (55) Morvan Lebesque : Camus par lui-meme p.32
- (56) l'envers et l'endroit p.24
- (57) Pierre Nguyen-van-Huy : la métaphysique du bonheur chez A. camus p.30
- (58) François Chirpaz : le Corps. p.86
- (59) ibid. p.38
- (60) l'Envers et l'endroit p.25
- (61) G. Brée : Camus p.21
- (62) Carnets I p.173
- (63) ibid p.41
- (64) The myth of Sisyphus Hamilton版 1955年
- (65) Carnets I p.2
- (66) Jean Grenier : Absolu et choix p.3
- (67) Albert Camus II Configuration : Frang Rauhut : Du Nihilisme à la «Masure» et à

l'amour des hommes : Franz Rohut とのインタビュー p.19

(68) Actuelles I p.254

(69) Jean-claude Brisville : Camus : réponses à Jean-claude Brisville (1958)

(70) le mythe de Sisyphe

(71) André de Richaud

(72) Carina Cadourek : les innocents et les coupables p.14 注参照。

(73) P. Ginestier : la pensée de Camus : Appendice : la dernière interview : Mr. Robert D. Spector と の対話。 p.204

(74) G. Brée : Camus p.64~66